

ひだか しろう  
**日高 史郎**

県民健康プラザ  
鹿屋医療センター院長（鹿屋市）



**【プロフィール】**

出身は、鹿児島市です。小・中・高と鹿児島市で、大学は、3年間くらい福岡で工学部に通っていましたが、鹿児島大学医学部に入り直しました。

医師になろうと思ったきっかけは、両親の出身地、屋久島にいる親戚から医者にならないと言われて、なってもいいかなという感じです。最初は消毒の臭いとか血を見るのは余り得意ではなかったので嫌だったんです。

鹿大の第一内科に入局し、その内科の中で転勤が色々あって、それでこちらに派遣されたんです。第一内科の専門は循環器、心療内科、血液と膠原病、糖尿病、内分泌、呼吸器があって、僕は血液と膠原病をやっていました。

鹿屋医療センター勤務は、3回目で平成20年10月から6年経ちました。

**【日頃の思い】**

最初は副院長で、半年してから院長になりました。色々難しいことが多く、総務省は、公立の病院は収支を黒字にしないという。公立病院改革により経営状態を良くして、医療の体制を整えなさいということで、経常収支と給与率と病床利用率の3つの項目の目標を定めてそれに向かって努力しなさいということでした。

経営面以外では、今、医師会の先生たちとは連携がうまくいっていると思います。一般的に僕らの診療科は、風邪とかちょっとした病気は置いておいて、二次救急と専門的な医療に特化しようということに取り組んでいます。

ただ、二次救急とか専門医療なので予約制とか紹介制にしているんですが、その中でも、どうしても二次救急だけで対応できないのが、脳外科と産科です。産科はホットラインがあって、急を要するときは受けますし、脳外科の場合も急を要するので、一次救急まで診ます。

師会の協力がいいです。鹿屋方式と言って、時間外の小児科の一次救急を引き受けるため、大隅広域夜間急病センターが出来て4年目になります。

医師会の内科の先生たちが小児科も診て頂いています。

それと、救急隊との連携が、この地域はよくできているんじゃないかなと思います。

不便な点は、うちの病院で全部の専門的な領域を揃えられるほどドクターが多くないということです。以前は眼科、耳鼻科、整形外科があったんですけども、整形はおぐら病院のほうに集約になりまして、耳鼻科は入院できる場所がないです。僕らのところで耳鼻科で困ったら、鹿児島医療センターか鹿児島市立病院、大学病院にお願いしています。

それ以外にも、例えば内科の中でも、今、僕らは循環器の専門なんですけど、消化器を専門にする先生とか、呼吸器を専門にする先生が足りない。ですから、消化器という、胃腸に関しては外科の先生が検査もしてくれているわけです。また、消化器の中でも特殊な技術を要する手術の場合は鹿児島から派遣してもらっています。

もう1つは、星塚敬愛園に肝臓と胆道と膵臓、この辺の領域を専門にしている先生がいて、1人は週に1回、1人は2週に1回来られて、その検査が必要なときは診てくれるのですごく助かっています。

**【プライベートについて】**

鹿児島市内に妻と次女が住んでいて、僕は鹿屋市に単身赴任です。長女はもう結婚して県外、次男が今、福岡でまだ学生。

彼も1回薬学部に入ったんですけど、また医学部に入り直しました。

休日は仕事かゴルフぐらいしかしていません。ゴルフの場合は趣味というよりも付き合いが多く、医師会の先生と月に1回医人ゴルフというコンペがあるので、年12回のうち10回は大隅カントリーに行きま

この地域の良さというのは、やはり医  
す。

大隅半島で好きな場所は、海が見える  
ところですね。

食事は本当に安くておいしいところが  
多い。よそから来た先生を連れて行って  
もおいしいですねと言われますよ。

そこで、僕らが鹿屋に来た先生に言いた  
いのは、ここに来たら焼酎がうまいと  
か、料理がうまいとか、それもいいこと  
なんですけど、それをつくった人、生み  
出した土地、そういうのを全部愛してく  
ださいと。そうでないと意味がないと思  
うんですよね。これは誰がつくったの、  
これは誰がとってきたの、どこでとっ  
てきたの、そう思いませんか。

だから、医療だけじゃなくて、人と  
かそういうのも好きにならないと、連携  
とかコミュニケーションもうまくいかない  
んではないかと思います。

僕は自炊していますが、単身赴任して  
いて大変なのは掃除ですね。洗濯はまだ  
洗濯機に入れておけば干すだけなので。  
掃除はずっと掃除機をかけないといけな  
いし、ごみを捨てないといけない。特に  
布団を干すの大変ですよ、灰が降って  
くるし。もう今は市販のスプレーです。  
スプレーして乾燥機にかけてます。

### 【医師を目指している大隅の子供たちや 全国の医学生等へ】

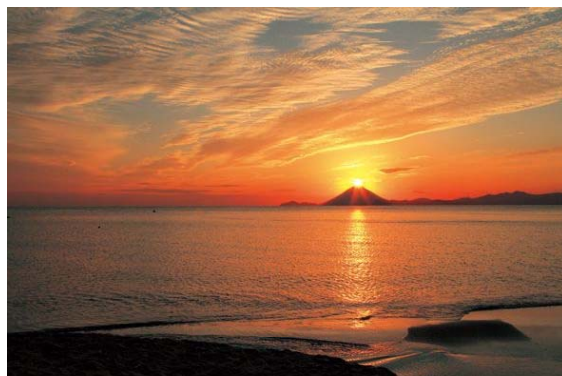
結構、医者って難しいです。学校の先  
生でもそうですけど、お互いの気持ち  
が通じ合わないと、何の仕事でもそう  
なんでしょうけど、より人と人のつき  
合いがうまくできないと医療の構築が  
できないですね。一方的に、「このお薬  
でどうですか」とかやっても、大半の  
人はそれが効くんでしょうけど、効か  
ない人とか、飲みづらい人とか色んな  
人がいます。

それと、色んな考え方の人がいるので  
、それらの考え方を理解できるかどう  
か。あとは、よく学校で、人と意見が  
合わないと、違った考え方をしていると  
外されることがあると思いますが、そ  
ういうことも理解できないと難しいで  
しょうね。それと、みんなそれぞれ長  
所もあるんですけど、短所もあって、  
ハンディキャップのある人もいますよ  
。そういう人たちを全部同じように見  
れるかどうか。差別なく対等に扱える  
かどうかですね。

仕事としてはいい仕事ですけど、やっ  
ぱり、つらいときもあります。うれし  
いと言っても、僕らから言えば、ちゃ  
んと病気を治して元気にしてやるのが  
当たり前なことで、僕らは当たり前と  
思っていて、治らない方がやっぱり  
ちょっと残念だなと感じるんです。患  
者さんはあっさり治ったら、すぐ喜  
ぶ人もいれば、逆な人もいますよ  
ね。治らなかつたら何で治らないん  
だと言っている人も。だから、病院に  
来たら全部治るものと期待されて来  
る患者さんに応えられない時に、そ  
れが医療者側の精神的なトラウマに  
なるので、それも乗り越えるだけの  
心の強さがないといけません。

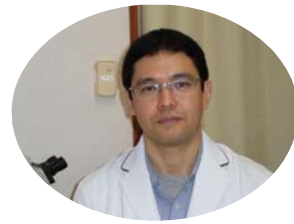
それと、僕らの仕事というのは、問  
題を解決する喜びとかそういうのが  
ないと長くやっていけないかもしれ  
ません。

これは本に書いてあったことで、受  
け売りです。「モチベーション3.0」  
というのがある、動物実験なんです  
けど、サルだったか鍵の付いた箱を  
一生懸命開けようと興味を持ってす  
ると、開けて喜ぶんだと。次に、今  
度はうまくできたら報酬をやる。餌  
をやると、また頑張って一生懸命  
するけど、その報酬をとってしま  
うとやらなくなると。報酬をやら  
なかった群は最後まで興味を持  
ってするんだと。動機付けと言  
うんですが、それは問題解決をした  
喜びとか、あるバリアを乗り越  
えた喜びというんですかね。そ  
ういうのがないと長くは続  
けられないかもしれないというの  
を感じます。



大浜海水浴場（南大隅町）

ふくまる皮膚科院長（垂水市）



### 【プロフィール】

宮崎県えびの市出身です。隣の市の小林高校から鹿児島大学に進みました。

医師という仕事を初めて口にしたのは、幼稚園の頃に将来の夢として版画に「おいしゃさん」を描いた時だと記憶しています。実際に職業として意識したのは、高校の3年に上がる前の春休みに体調を壊し、1週間ほど入院した時だったと思います。患者さんの不安を取り除ける、素晴らしい仕事であると感じました。

大学卒業後に専門として皮膚科を選んだ理由の一つは、直接目で見たり、手で触れたりすることで多くの診断が可能であるということです。現在に至るまで様々な画像診断用の機器が誕生していますが、そのような機械をほとんど使用しないことに興味を感じました。もう一つの理由は、大学生時代に見学した鹿児島大学病院皮膚科の医局の雰囲気がとても良かったことです。今でも医局で一緒に仕事をした先生方とは交流があり、色々な勉強会などに参加させてもらっています。

平成6年に医師になり、初めの2年間は大学病院で研修し、その後大学院に入りました。平成12年から2年間、川内済生会病院で皮膚科の勤務医として働きました。平成14年に再び鹿児島大学病院に勤務し、平成16年4月にここ垂水市で開業しました。

垂水市を開業の場所を選んだのは、市内に皮膚科の開業医がなく、非常勤医として垂水中央病院に週1回来ていたことでスムーズに診療が行えると思ったからです。

### 【日頃の思い】

皮膚の症状は患者さん自身が目で見たり、感じたりできるので、皮膚疾患が一番身近な病気だと思います。だから、なるべく患者さんの近くで診療ができることは、意義があると考えています。「すぐに見て貰えて良かった。」とか、「遠くまで行かなくて良かった。」などうれしい言葉を頂くこともあります。

開業して思うことは、近隣の病院や診療所の先生方が良く協力して下さることです。専門外の診察が必要な患者さんや、

入院が必要な患者さんを快く引き受けて下さいますし、皮膚科の患者さんに関しては当クリニックに紹介を頂いています。また、患者さんや周囲の住民の方々も優しい地域だと感じます。御陰で診療がとてもやりやすいです。

### 【医師確保について】

まずは大隅地方が仕事のやりやすい地域であることを広報する必要があると思います。また将来的には人口の減少が一つの問題だと思います。人がいないと患者さんも少なく、仕事のやりがいを感じにくいのではないかと思います。診療を行うには良い環境なので、地域が活性化して人口減少に歯止めがかかれば、医師の確保もやり易いのではないかと考えます。

### 【プライベートについて】

現在は鹿児島市の自宅からクリニックまで、毎日フェリーを使って通勤しています。フェリーには桜島を見ながら約40分間乗っています。のんびりできる時間でもあります。開業している垂水市でおススメの場所は、高峯のつつじヶ丘公園や猿ヶ城溪谷、千本イチョウなどです。週末は子供たちと過ごすか、時に趣味のゴルフに行っています。



高峯のつつじヶ丘公園

### 【医師を目指す大隅の子ども達へ】

大隅地区には、豊かな自然があって、住んでいる人々は優しくて、肉や魚や野菜など美味しい食べ物もあります。そういう大隅を故郷として育った子どもたちが将来医師になり、今度は大隅の地で医療を行うことは、ひとつの理想の形である気がします。





ほりのうち  
**堀之内 史郎**  
しろう

池田病院（鹿屋市）



【プロフィール】

出身は、鹿児島県です。生まれたところは指宿、今は鹿児島市ですけど、喜入の中名というところですね。

父が教員だったので引っ越しをいっぱいして、小学校は2か所、中学校は3か所変わりました。高校、大学は1か所で鹿児島大学医学部を卒業しました。

医師以外であれば、学部に入って、それから色々な職業とかを考えるとと思いますが、医学部に入るとほとんどの学生は医師になりますよね。だから、医学部を目指そうと思った時が医師になろうと思った時で、そこには普通でいう何かドラマになりそうない話はなくて、ただ偏差値の関係でしょうかね。医師になって病気の人を助けるんだというような純粋なことではありませんでした。

専門は消化器内科、胃腸内科です。

自分は本当は、外科向きの人間で、体力勝負の方がと言うと外科の先生に怒られるかもしれませんが、そっちの方が好きだったんですけど、ものすごく汗かきで、手袋の中が汗で充満してしまうので、外科には向かなくて、内科と外科のはざまにあるのが消化器内科だったので、こちらがいいかなと思いました。

池田病院には平成5年の4月から非常勤で来て、常勤になったのは平成7年だと思います。

【日頃の思い】

池田病院は内科の病院なんですけど、内科の病院で、ここまでの領域を網羅している病院はそれほど多くはなくて、そこがうちの強みなのかなと思っています。

外科の分野にはそこまで範囲を広げなくて、内科を充実していこうというのが理事長の思いだったんじゃないかなと思いますね。それが実際、そのように今なっているのかなと思います。

大隅地域で一番大変なのは、鹿児島市から結構、遠いことですね。曾於市から

鹿屋までの高速道路が今度開通しますが、高速道路に慣れていない方がいて、軽トラを運転される方が一般の生活道路と同じように使い70km/h出さないんです。

この前も40km/hで走っていて、後ろに長い列ができるじゃないですか。ああいうのを何とかして欲しいなという希望があります。高速道路は高速道路らしくいて欲しいんですよ。

高速道路に関連して言うと、ちょっと話が大げさかもしれませんが、九州の中では、福岡、熊本、鹿児島というのは結構優遇されているけど、大分とか宮崎はそうでもない、鹿児島の中では、大隅半島は、今度東九州自動車道が出来ましたけど、そういうことで今後変わっていけばいいなというふうに考えています。

【医師確保について】

大隅地域に医師を呼ぶためには、大隅半島をどうしていくかということだと思います。そうすると、高速道路の話をしたけど、大隅の地域性といのは、九州の中の地域性の連続で来ているところがあり、そういうところが解決されていけばいいのかなと思います。

それと、今、研修医の先生たちがいろんなところで研修できるようになっていますよね。その先生方が大隅半島で研修しようとか、もしくはその後大隅半島で仕事をしたいというような魅力的な病院とか、地域とか、そういったのも皆さんと同じところを目指していければいいんじゃないかなと思いますけどね。

そのために何をするかですよね。そうして目標を立てるのはいいけど、具体案を出していかないといけないですよ。

ただ、医療に関しては、やっている中身というのは、大都会であろうと、田舎であろうと一緒のはずなんですよ。医療行為そのものはですね。国の医療保険制度で、日本という国は非常に恵まれていると思いますね。

だから、田舎であろうが、都会であろうが一緒のことをしていると。そこについては病院自体、皆さん自信があるんじゃないかなと思います。

高速が出来て、鴨池フェリーの客数の変化とかあるかもしれませんが、一番効率の良い交通網を築いて頂きたいと思います。

### 【プライベートについて】

家族と一緒に鹿児島市内に住んでいますので、フェリーで通勤しています。

趣味というか、休日の過ごし方は、ゴルフだったり、音楽を聞いたりとか、映画鑑賞もやっています。ホームシアターを作っていますので、映画館にはもう行かなくなりましたね。

大隅のお薦めのスポットというか、県外から見えたとお客さんには、空港に着いたら、垂水側から桜島を見せるようにしているんです。垂水側だったらまだ昭和火口も今は見えますし、間近に見れますからね。それに、桜島フェリーで鹿児島市に行くというのが非常に新鮮みたいですね。

桜島ってみんな鹿児島市の城山展望台から見た桜島しかイメージがないんですね。もう1つのルートがあるというので見ていただく、それもいいんじゃないかなと思います。

### 【医師を目指している大隅の子ども達や全国の医師、医大生へのメッセージ】

メッセージは特にありません。それよりも、実際にうちの病院に子ども達が来て、我々と直接話し触れ合うことの方がより子ども達に伝わるんじゃないですかね。



桜島（垂水市海潟から）

まえだ としひろ  
**前田 稔廣**

前田内科院長（鹿屋市）



【プロフィール】

出身は鹿屋市です。高校まで鹿屋で、大学は埼玉医科大学です。医師になるきっかけですが、とても、人様の参考になるような話ではないですが、少しお話しさせていただきますと、鹿屋で開業医として苦勞している父の背中を見ながら、幼心に、色んな夢がある中で、こういう形にはなりたくないなあと痛感して、反発していました。大学進学の時もまだ、その気持ちは強かったです。開業医になることが義務付けられた為の勉強が途中でいやになったんですが、尊敬、溺愛された親の手前、ぐれる訳にもいかないの、ある程度よそおっていましたね。勉強ができる人より、魅力のある人間が側にいまして、魅力ある人間ということを追求していました。特に、親元を離れてから、自分の感じるままにやりたいことを、感性のままやってきました。何の打算もなく自己を磨く、そのことを座右の銘にしていました。又、思春期は北杜夫、畑正憲にも共感しました。付け加えると医者にはなりたかったが、開業医にはなりたくなかったというのが本音です。親父もそうだったようです。

そんな愚息の私を、医療に目覚めさせてくれたのは、日本医科大の救命救急センター科に入局して、本物のすごさを知ったことがきっかけとなりましたね。

又、大学に入っても、まだすばらしい医師を目指すというより、アメフトに集まったすばらしい仲間たちに出会え、夢中になりました。当時、京大が日本一になり、自分たちにも、できるんじゃないかという妄想めいたものにも取りつかれました。とにかく早朝練習から、ナイト練習、その後のミーティングと、一日中、アメフト漬けでした。また、日本体育大学、社会人日本一のシルバスターと、合宿はともに汗を流しました。そんな日本一をめざす本物たちのすごさ、又、埼玉アメフト部の影の努力を貴ぶ精神を知ったことが後日、大きな礎になっています。アメフトで一番印象に残るのは、個人的には、当時の日大の篠竹監督に練習試合後、お褒めの言葉をいただいたこと、

在学公式戦以外含めて通算100TD記録した事。来日したジョーモンタナのチームDrをやったことなどです。チームとしては、慈恵、北里大学とのその年一年かけての決勝の戦いは懐かしい思い出です。

大分時間がかかり、医者になってもまだ、不純で、ある意味、開業医にならなくて済むように、救急の門をたたきました。劣等生でありながらその体力を評価いただき？面接を経て入局させていただきました。当時、日本医科大学救命救急センターは全国からその実績を評価されつつあり、前向きな猛者達が集まってきていました。又、入局して、そこを引っ張るスター達の本物のすごさを知り、又、医師は、このぐらい働くものとも刷り込みされました。医局内の仮眠室で寝泊まり、ひと月に家に帰れるのは2、3回。まさしく不眠不休の医療でした。当時を思い返しますと、毎朝、カンファレンスルームには、何十人の人間の豪快な笑い声がこだましていました。不眠状態でかなり、テンションが高かったのを思い出します。しかし、カンファが始まると、静まり返り、真剣な議論が始まり、殴り合いになりそうな真剣さがありました。教科書のない医療です。正解は数時間後に患者自身がだし、そして、明日のカンファで前日の議論が正解が生存、死亡という形で発表されます。敗者をせめはしません。みんな黙って昨日の議論に白黒をつけていました。そして次の戦いの糧にする。いつも勝者が決まっているほど甘くはなく、だから、潔く、今回の負けも認める。ハッキリはきかない。検証されるから、さすががしい戦いでした。そこにはそこまでの自分のキャリアも通用しない。今の頑張り、輝きが報われる世界でした。現在、そこを巣立った人は、あるものは教授として、あるものはできる本物の医者として全国の救急の一线で活躍しています。

日本医科大の救命救急センターは、トリアージの救急ではなくて、自己完結型の救急でした。多発外傷、中毒、熱傷をスペシャリティーとした集中治療室管理を行いながら手術も全身行っていました。98%の熱傷も経験しました。有名になった事件のほとんどが来ていました。コンスタンチン君、中国修学旅行中の列車事故の土佐高校



生,,。最たるものは、私は離れてからですが、銃撃された国松警察庁長官を助けたのも日本医大ですね。運ばれたのが日本医大以外だったら確実に命を落とされています。言葉を発することなく、己のメスさびきだけで皆を引っ張るスター達がたくさんいましたね。私の師匠の益子教授は救急医療の第一人者と言える人で、ドクターヘリの導入やドクヘリのTVドラマ「コード・ブルー」のモデルの先生です。

救命センター時代のもう一つの大きな思い出は、小さいころからの夢であった船医となって日本、ハワイ、サンフランシスコ、ハワイ、日本と乗船したことです。日付変更線のお祭りでは船乗り100人相手に相撲大会で、優勝を勝ち取りました。

そんな居心地のよい環境の中、私が帰郷したのは、一度も後を継いでくれと言ったことはない親父が倒れた時に、枕元でどうしますかと聞いたら、「うん...、帰ってきてくれ。」という一言でした。涙があふれました。自己中心的な価値観で、周りの人の気持ちなど何も顧みていなかったことを痛感させられました。すんなり受け入れられました。その時の新たな、日本一の外傷医を目指す夢追いも一瞬にリセットされました。又、尊敬するアメフトの先輩の一言も響きました。「人生の流れに反発してばかりで、生きてきたんだから、そろそろ流れに従うのもいいよ」

とはいえ、帰郷時、1年位でまた、戻って来ますと言って帰ったことを思い出します。いつの間にかこちらに長く居付いてしまいました。長く居付いた理由を振り返りますと、当時住み込みで、准看になるために勉強する学生が寮生としていました。どちらかと言うと、その人達は家族的に、また、経済的には恵まれている方ではない人達でしたが、すごく純真で、頭も良くて、魅力ある人達でした。僕にとっては、そのことが、非常に、新鮮で、この埋もれている人材を幸せにしてやりたいというのが率直な思いでした。一緒にやっといこうと、その時感じました。一緒に寝泊まりして、受験勉強も一緒にしたりしましたね。みんな成長してくれて准看、高看になりました。卒業後も、もっと、外を知るべきと思い、知り合いの救命救急センターに派遣しました。その仲間と現在もともに働いています。彼らも、もう25年余りもいてくれますね。そのすばらしい仲間達と現在は介護の世界に挑戦しています。

地方の救急はこの住み込みの看護婦さんが担っていたといつて過言ではありま

せん。豊富な労働力があり、みんなもそれで勉強ができて、育成にも繋がっていたんです。今みたいなペーパードライバーの看護師さんではなく、准看のライセンスを取った時点でもバリバリの看護師さんになっていたんです。

現在、救急科専門医、日本プライマリケア学会認定指導医、産業認定医、臨床内科医会の専門医指導医などの資格を取っています。患者様は父の時代からの呼吸器が多く、患者さんに育てられました。呼吸器科は学会には所属していますが専門医は持っていないです。

大隅に帰ってきて、夜間救急をどうするかについてはずっと携わってきましたが、一番特徴的なことは、地域住民が啓発活動をよく受け入れてくれたことですね。通常は、啓発してもあまり受け入れられないんですが、人口流動のないこの地域では啓発活動は有効でしたね。大体、鹿屋医療センターという公的な病院での一般外来を止めるということを受け入れたということがすごいですよ。だからそこに住民性が出るんじゃないでしょうか。一般的にはあり得ないですよ。何で公的な病院なのに診ないんだということ、反乱が起きますよね。まず出発点がおかしくなります。それを素直に受け入れていただける地域性だったんですね。又、これは中尾院長先生の大英断でした。世の中では、コンビニ受診など色んな社会現象があって、どこの地域も夜間の小児科、救急がつぶれたんですよ。そういうこともあり、鹿屋の輪番制がクローズアップされて、それが逆効果で日中よりも多いぐらいの来院の仕方でした。今になっては鹿屋市医師会の先生方がなんで頑張っていただけのか不思議な気がします。10年間守り通したということとは驚きです。医師会もたまたま30年に1回位の世代交代があって、ちょうどそういうことを受け入れても体力のある世代だったということと、2代目とかが多かったのも、初代の医師と違って地域に貢献しないといけないというチームワークがあったんですね。まあ地域住民も医師会も良かったと思います。



大隅広域夜間急病センター

### 【医師確保について】

故郷へ貢献として、こちらに永久に帰っていただくということだけではなく、田舎の単調に飽きたら、又、向上心に火が付いたら都会に帰りスキルアップ、都会で燃え尽きたら、また田舎という形はいかがでしょうか。定住は気が重いです。現場にいて、こんなところを勉強、技術を磨きたい、または必要と思ったとき、全国の大学、地域と交流できるシステムを作りたいものです。皆さんがお持ちの夢をご相談いただければ、自分の知りうる範疇、知らないところでも責任を持って橋渡しを行ってまいりたいと思います。

一番の夢は、鹿屋医療センターを医師を供給できる鹿屋体育大学附属病院にしたいですね。そして、鹿児島県から出て行く人達に、新しくティーチングスタッフの枠（教授等）を作れば、絶対残るだろうと思います。私立大学が何で大きくなるかということと分院を作ってそこに教授ポストをつくって、いい人材を留保していますね。

もし体育と医療がコラボすれば、鹿屋体育大学の魅力も増すだろうし、学部を作るわけじゃないから、臨床教授でもいから医療センターをその附属病院みたいなものにできれば、そして鹿児島大学と張り合えば、また医療のレベルも上がると思いますよ。

医学部がない大学の附属病院というのが出来るかは承知していませんが、保健体育とか健康科学だったり、そういう分野でね。そうなれば、各種スポーツのキャンプ地としての鹿屋、大隅に来るようになり、鹿屋、大隅の価値を上げる策にもなりますよね。

現実的にできるかどうか分からないけど、夢・目標ですね。ただ黙って地域のいい物をアピールしても効果はないですよ。東京など都会にとっては、下北半島も大隅半島も一緒なんですよ。

日本体育大学には、救命救急科ができましたね。鹿屋体育大学も救命救急士を養成する科を作れると思います。そうなると医学系の教授とかそういう誰かを呼んで来て、だんだん色んなことが広がると思うんですよ。自分たちで医師を作るところをつくるのが一番手っ取り早いと思います。

### 【プライベートについて】

妻と2人家族で、彼女も薬剤師として働いています。ほかに愛犬が3匹いましたが、3年前死別いたしました。趣味はゴルフ、オーディオ、ギターでの仲間との曲作りぐらいですね。

### 【好きな風景について】

好きな風景というと、鹿屋市の古江の丘から見た夕暮れ時の薩摩半島、養殖イカダが夕陽で乱反射し、絶妙な光景を醸し出します。錦江湾を一緒に眺めたフランスのお客さんが、「ビッグリバー」といったのが印象的でした。

### 【医師を目指す大隅の子ども達、全国の医師、医大生へ】

最初にも話したんですが、私の場合、自分の中で、“本物”のすごさを感じ、人生観が変わりました。私の場合はラッキーな形で自分の感性の中の“本物”に出会うことができましたが、“本物”というのは感性のものであって、評価が分かれるところでしょう。決して現時点で高名なところという位置づけではありません。又、最初から本物と評価されていたわけではなく、むしろ逆の評価が多いものです。今まさに夢をつらぬき伸びようとしているところに存在していると思います。名をなし、上り詰めたところはがっかりすることが多いです。伸び盛りを自分の感性でみつけることで、打算のない感性を養い、感性にひっかかったら、勇気をもって臆することなく突き進むべきです。本物は、身近なところに存在するかもしれません。



荒平天神（鹿屋市）夕景

まつお しょういち  
**松尾 昭一**

曾於医師会立有明病院院長  
(志布志市)



**【プロフィール】**

福岡県北九州市の出身です。中学校、高校は東京で過ごしました。大学は、鹿児島大学です。

医師になった理由ですが、僕は高校のときは文化系だったんです。大学も文学部にちょっと行っていたんです。前向きにやりたいという仕事はなく、ずっと本でも読んで暮らしていけたらいいなと思っていました。ですが、このままじゃ飯食えないなと思って、だから、あまり立派な理由ではないです。

大学在学中に相当勉強をして、文学部2年の時に医学部に再入学しました。

最初は大学の皮膚科にいたんです。途中で病理学というのをやりたいというか、友達もいたし、教授も立派な人だったので、鹿児島大学の第二病理学教室で病理の仕事をし、博士号を取りました。それでまた臨床医に戻ろうと思ったときに、鹿屋市のバイト先の病院の院長から、うちに来ないかと言われたのが最初の縁ですね。それからはずっと大隅地域で勤務医を続けています。

臨床に戻ろうと思ったときに一番興味があつた分野が形成外科でした。鹿児島市立病院に初めて形成外科ができて、最初の形成外科部長が、面識はなかったんですけど鹿児島大学の先輩だったんです。そこに3年ちょっといました。一方では、鹿屋の病院に勤めながら形成外科を半分半分という時期がありました。

今、曾於の医師会に入って9年、こちらの院長になって5年ぐらいです。

ただ、医師になってからは、基本的には高齢者の方の診療にずっと携わっています。

**【日頃の思い】**

大学院のときの恩師によく言われたのは、地域医療に貢献するように、という事です。医者だけじゃないんでしょうけど、都会に集中していますよね。それは、逆に希少価値があるわけです。

やりがい、手応えがあるということです。

患者さんを通じて随分勉強させてもら

いました。何かあつたら他の先生に助けてもらおう、どこどこ病院に送ればいい。だけど、今、ここでは自分しかいないという事もあるんです。

ある時、総合医学Integrated Medicineという言葉が頭の中に浮かんできました。地域の医師は自然と総合医学をめざすしかないと思います。

今の病院は働きやすいです。患者さんみただけ、スタッフ一同、小ぢんまりしていて、あまり大きいと訳が分からなくなるというデメリットもあるようです。

それから地域的にお年寄りが多いのですが、苦勞してきてこられた素晴らしい人が多いです。

もう1つは自然が好きなんです。鹿児島の自然はとても素晴らしい。特に大隅は私にとっては第二の故郷です。

人がたくさんいるところが余り好きじゃない、待ったり並んだりするのが嫌いだから。ただ若い時には、大都会での体験も大切だと思いますが。

この地域ならではの大変さということ、高齢化しているということ、これは日本中の問題でしようけれど、一人暮らし、二人暮らしのお年寄りの老老介護、あるいは息子さん、娘さんの介護負担は非常に大きい。ただ、昔からのつながりみたいなのが残っているのは都会にはない強みかもしれません。ただし、これから先もそういう地域サポートが継続されるのでしょうか。無理かもしれない。

**【医療の確保について】**

自発的な動機で来てもらいたい。行ってやってもいいみたいな気持ちで来てもらいたくない。そういう人は大体役に立たないように思います。

行ってみたいという理由は自分で探すしかないんじゃないですか。僕は僕の理由があるけど、それは僕の理由だから。もしかしたらお金がたくさんもらえるからというのが理由かもしれないし、楽をして医療ができると思っているのかもしれない。

確かにそういう時代もあつたんです。僕

が大学院の時なんか。そんなに今みたいに忙しくないし、訴訟とかそういうこともひっくるめて、牧歌的な時代でした。

今は情報量、仕事の内容も複雑になり、若い人は本当に大変だと思います。

### 【プライベートについて】

子供は3人いますが、それぞれ別の仕事をして、今は離れてくらしています。ただ、私は単身赴任をした事はありません。小さい頃は良くアウトドアで一緒に遊んでいました。思春期になると残念な事に遊んでくれなくなるようです。

休日は、自然の中において歩いたりとかが好きです。あまり人がいないところを見つけて出して。いっぱいありますよ。

夏場は海にも行きます。釣りは今はしません。山の方が多いです。何となくぶらぶらしているのが好きなんです。あとは読書です。

こちらは食材にはすごく恵まれているでしょう。サバイバルできるのは大隅と考えてもいいかなって。たしか、牛、豚、鶏、ウナギ、ほとんど1番か2番でしょう。おいしい水があるでしょう。

戦争の直後に戦争中も含めて、食うや食わずの時代があったけれど、あの時代でも大隅には食糧難ということはなかったって聞きました。

### 【医師を目指している大隅の子ども達や全国の医師、医大生へメッセージ】

人様の役に立てる仕事です。そして、医者だけじゃないんだけど、医療・介護・福祉系の仕事は人様から「ありがとう」っていつも言われるんです。極端なことを言えば、患者さんが亡くなったときでもありがとうと言われます。そんな仕事は他にないんです。

医師を目指すといったときに、なりたいたいというのは分かります。もちろん私もなりたかったから。向いているのかなというのを最初に非常に厳しくチェックして欲しいですね。そういう選び方をしないと、本人もつらい思いをします。

医師国家試験に合格する事から始まり、医師であり続ける事ができるか、これは私自身のテーマです。

頭がよくて優秀な人が医学部にかなり来ているけどもったいないと思う。研究に向いている人はその世界でやればいいのに、何か成績がいいから君は医学部に行きなさいみたいな変な指導をするのはやめてくれと言いたい。最も医者としても研究は大切です。



悠久の森（曾於市）



宝満寺（志布志）



豊かな水

まつした かねひろ  
**松下 兼裕**

松下医院院長（志布志市）



**【プロフィール】**

出身は志布志市で、小学6年まで志布志市にいて、鹿児島大学へ進学しました。専門は、外科、救急です。腹部外傷をやりたくて、最初救急部、その後外科へ進み、40代半ばで志布志に帰って来て、親父の後を継いで十数年になり、今じゃ内科を含め何でもって感じです。

**【プライベート】**

女房と子ども（娘）4人は鹿児島市に住んで、単身赴任です。娘4人と言うと、だいたい皆さん「若草物語ですね。」とお淑やかなほんわかとした世界を想像されますが、まあ～、元気なもんですわ、とび膝蹴りなんてのもあるし（笑）。上の子が小学3～4年ぐらいまではずっと一緒に、北薩とか鹿屋とかいろいろなところを回ったんですけど、やはり子どもの受験があって、家族は鹿児島市に住むようになりました。結果、私は単身赴任、地方で開業する医師の宿命でしょうか、田舎の一人暮らし、大分慣れましたけどね。趣味は、ゴルフ、釣り、アウトドアを楽しんでいます。この地域で好きな場所といわれれば、やはり海でしょう。お隣の宮崎県の都井岬から見る海は雄大で、そこから登る朝日何とも言えません。

**【日頃の思い・経営方針など】**

普通に診療、治療しており、明確な経営方針はありません。この地に父が開業して私が受け継ぎ40～50年になるでしょうか、患者さんとの長年培われた信頼関係の中で、余計な事は考えずに、今この人にとって何がベストかに専念できる気がします。あの爺さんの子どもだなんてチビちゃんが患者さんで来るとうれしくなっちゃいます。

**【医師確保について】**

鹿児島県の地域医療の崩壊は、鹿児島市が周りの医療資源を吸い上げた事が原因です。結果として、県全体では医師数は増えているのに、6割の医師が鹿児島市に集中しました。結果、鹿児島市は全国の中核都市で有数の医師過剰地域になり、鹿児島市以外の地域はすべて、人口当たりの全国平均医師数を下回っています。

鹿児島市の医療の適正化が必要で、それが鹿児島県全体の幸せになって行くのではないのでしょうか。

地方の医師不足の解決はなかなか難しい。やはり都会には魅力があり、若い人が行きたがるのは自然の流れでしょう。実際、私も子供の教育のためと言いながら鹿児島市へ家族をやっちゃってるわけですから、あまり偉そうなことは言えません。今の地域医療の崩壊は、行きつくところまで行って、「あ～、これじゃいかんな、何とかしなきゃ。」と皆が本当に気づかないと改善しないのかなあ。気づいた時には時すでに遅しにならなければいいんですけど。今の私に出来る事は、この状況の中で、目の前の出来る事を一つ一つやっていく事です。

**【医師を目指す大隅の子ども達、全国の医大生へ】**

あなたがやりたい、正しいと思うことを一生懸命やってください。いつの時代でもどんなやり方をしても、必ず良い所と悪い所があり、良い所を伸ばし、悪い所を削っていくしかありません。ただ、医師になれる高い能力だけでなく、税金をはじめ周りの多くの支えがあって医師になれたのですから、社会貢献も果たして下さい。

最近よく思います。都会に心を本当に満足させるものがあるだろうか。私も都会で仕事をし、いろんな経験をしてきましたが、心が満たされていたかと言うと、素直に首を縦に振れません。都会ではあなたを労働力としては歓迎してくれますが、結局サロンには入れてくれません。あなたがいなくなっても代わりはいるし、存在自体を喜んでくれる人はほとんどいないでしょう。それがあるのが故郷です。自分の生まれ育った言葉で話し、お互い知った人に囲まれ、その家族、そして新しく生まれる子どもたちを心穏やかに診るのは、なかなか良いもので、心満たされます。

フランス料理の偉人と呼ばれるフェルナン・ポワンの「若者よ、故郷に帰れ。その町の市場へ行き、その町の人のために料理を作りなさい。」との言葉がわかる年齢に私もなってきたのかな。

まつせ えつろう  
**松瀬 悦朗**

垂水徳洲会病院長（垂水市）



**【プロフィール】**

出身は長崎県の佐世保市で、高校まで佐世保市にいて、大学は長崎大学です。

医師になろうと思ったのは、多分小学校の後半ぐらいのときです。

もう脳出血で亡くなってしまいましたけど、僕の生まれた家のお向かいが内科の先生だったんですよ。

その先生が僕の急性糸球体腎炎を見つけて治療してくれたり、盲腸を発見して外科を紹介してくれたり、じんま疹の治療をしてくれました。医師になることの話をしてもらったことなど1回もなかったんですけど、何となくその先生みたいになりたいなと思ったんですね。

専門は脳神経外科です。こちらを専攻した理由は3つあるんですけど、1番は脳みそはうんこしないからです。脳みそはばい菌がない世界なんです。心臓とか血管も実はばい菌がない世界ではありませんけど。

もう1つは、脳の形ですね。僕はくりっとした曲がったものが好きなんです。前頭葉から側頭葉のくりっとして曲がったところが好きなんです。

3つ目は、脳みそにはリンパ節がないんです。リンパ節って意外と大事で、大腸とか肺の外科で肺をとったり、腸をとったりすると、周りのリンパ節を切り取って、何番目の所属リンパ節って一々病理に出さないといけないんです。一生懸命手術して疲れたなと思った後、検体を診て、ここが1番、ここが2番って、リンパ節を一々取る必要があるんです。それは大変だと思いましたね。

垂水徳洲会病院には、平成18年9月に院長としてきました。

大学を卒業後、大学病院の脳外科で研修をして、5、6年目ぐらいに縁があって、長崎の徳洲会病院にちょっと応援に入り、そこから、鹿児島徳洲会病院のオープンのスタッフで来ないかと誘われて、脳外科の10年先輩の先生もいたので、一緒にやろうかということになって鹿児島徳洲会病院に行きました。

それから4、5年ぐらいで先輩がやめ

てしまい、2、3年ぐらいは1人でばたばたしていたんですが、余りにも1人でやらないといけないことが多い中、応援は来ない状態が続き、このままでは、僕は潰れてしまうと思って、家族そろって佐世保に越したんです。

**【日頃の思い】**

この病院が徳洲会病院の中で鹿児島本土では一番古い病院なんです。山川とか、開聞とか、それから大隅鹿屋とか、鹿児島とかありますけど、一番古くからあった病院なんです。建物も本当に古いんです。地元の人みんなに聞いて知るしかないんですけど、古江にあったM先生という診療所の方がここに外科の病院を建てたんだそうです。それで手術室なんかもちろんあることはある、今はもう使えないけど。その病院が3年から5年ぐらいやって、やっていけなくなって徳洲会が買ったらしいですね。ばあちゃんたちの話だと、錦江外科とか、錦江湾外科とか言っていたらしいです。

看護師さんたちとかが、すごく患者さんとか、患者さんの家族の中に分け入ってよく観察しているし、おじいちゃんやおばあちゃんが病気になる、トラブルがあったときに、この娘さんやったらこれくらいは受容できるとか、息子さんや娘さんは、この人たちはパニックになってもうだめだから病院で収容してほしいとか、そういう算段をよく知っているんです。それは最初来たとき驚きましたね。家族構成とか、遠くにいる娘さんとか、そういうことまでよく知っていますよ。

そういう患者さんと患者さんの家族とかを取り巻く周囲の状況をよく知っているから、医者がふらふらして余りいないときでも病院自体が存続できたんじゃないかなと思いますね。

最近、三大疾患は基本的に集めるようになっていっているでしょう。狭心症、心筋梗塞とか、脳外科とか、脳卒中と心臓病とがんです。地域拠点病院というのがあって、拠点病院から申し送ってほかの病院に行くことになるでしょう。なかなかこうい

う病院でちょこっと手術をするにも非常に足かせが厳しい状態になっているんですね。

それは法令遵守ですから、厚生省がそういうふうに行っているんだとしたら、それに協力するのは筋だし、万全じゃないところでやはり十分なことができないと、うまくいけばそれはそれで患者さんたちも納得してくれるかもしれないけど、うまくいかなかったときに誰が責任を持つかという問題になってきます。

だから、完結できることと言ったら、やっぱり保存的な心不全とか、肺炎とか、手術を余り必要としないけがとか。実は整形も僕は手術得意なんですけど、やっぱり脳外科医が整形の手術をしていると、ちょっと問題があるかなと思ってですね。うちの手術室も大分、もう十何年使っていないので、そういうのも問題かなと思ってですね。だから、患者さんのことをよく知っているスタッフがいたり、環境を理解しているスタッフがいたりということが一番の強みかなと思っていました。

この地域ならではの大変さというところ、やっぱり地域で完結できないという部分ですかね。さっきも日曜日に転倒して足の骨折をしているおばあちゃんが来られて、結局、骨折の手術もできないんですよ。つい3～4年前までは市民病院に整形の先生が1人おられて頑張っておられたので、お願いして、リハビリはこっちでしますよと言って、手術後1週間ぐらいしたらすぐ転院していただいて、なるべく家族に負担をかけないようにしてお願いしていたんですけど、その方も引っ越されてしまって。垂水市内でがんの手術もできないし、脳卒中の治療もできないし、小児科、産婦人科はないし、整形外科も手術ができなくなっちゃって、霧島の医療センターに送りましたが、何ひとつ中規模以上のことで完結できるものがないという。

僕だって、肺炎とか、心不全とか、集中治療とか、脳の治療とかやろうと思えばやれるんですけど、1人とか1人半ぐらいのスタッフでそれをやっちゃうと、しかも看護師さんもそんなにたくさんいるわけじゃないところでやっちゃうと、ちょっと振り回してしまって大変かなと、1人じゃできないからですね。寝る時間も要るし、それが一番ですかね。

### 【医師の確保について】

最近うちに当直に来る若いクリニックの院長なんかとよく話すんですけど、まず1番は、やっぱり三次救急ではないわけですよ。それは生きるか死ぬかの理由のところもちゃんと受け取って何か価値判断ができれば、鑑別診断ができれば、これは脳みそなんだとか、これは心臓由来なんだとわかれば、ちゃんと何とか維持していけるようであればそういうところへ送ったりもしますけれども。

普通は、今はやっているインフルエンザの治療とか、熱が出たとか、脱水になって調子が悪くならないようにちゃんと受けとめてあげようとか、そういうのがほとんどなんです。いわゆる1次、2次救急です。あるいは、膝が悪いとか、腰が悪いとか、肩が凝るとか、そういう治療なんです。中には珍しい病気が入ってくるから、そういう目でちゃんと診なくちゃいけないんだけど、コモンディーズというんですけど、普通の一般的な病気ですね、それが余りにも多過ぎる。

だから、若い子はそればかりに埋没してしまうと、ちょっとつらいだろうと。僕みたいにもう50過ぎて、まあまあ頭も脊椎もやることはやってしまって、その上でというんだったらまだわかります。

70歳の医者が福岡から常勤で来るという話もあって、ぜひ来てくださいと言ったんですけど、息子に「ここで寮に1人で住んでいて孤独死はいかんよ」と言われて、やめた。だから、70過ぎてから1人で単身赴任ではなかなか難しだろうなと。

1人でやっていて、なかなかちょっと来てくれるかなという話が来てはまた砕け散って、もう1人68歳という人がうちに応援に来てくれるかなという話があって、見に来てくれたんですけど、その人は乗り気だったんですけど、東京に戻ったら、嫁さんから離婚届が出てきたとあって、これ以上単身赴任には耐えられないとか何とか言われて、それでぼしゃっちゃってですよ。

かといって、20代とか30代の医者がこういうふうには、コモンディーズの中で埋没していったというのは、医者になって10年、7～8年の人はもっとやりたいことがあり、同じことばかりだとちょっとつらいだろうなと思いますね。

それには勉強会がいいんです。いろんなネームバリューのある人、感染症で有名な人、あるいはCTの読影で有名な人、教育

的立場にある人、今は学生さんの中でも医学教育というのは非常にインターネットを通じていろんな読みやすい簡単な本がたくさん出ていて、本当に漫画本みたいな感じがします。本当にイラスト入りでわかりやすいものが多いんです。しかも、そういう本をたくさん書いていて、若い医者に有名なドクターがいらっしやるわけですよ。そんなネームバリューのある人たちが、いろんな話を定期的に来て来て話してくれる勉強会というのはそれだけでモチベーションになるんですよ。

例えば、行っても行かなくてもいい飲み会があるとき、日常の仕事から離れて飲み会に行くと、よその部署の人と話して、ああ、そうかと思って、よし頑張ろうという気になれるかどうかということが参加するかどうかの判断基準の一つとゆうんですが、医者にとっての勉強会、学会というのはそういう場なんです。行って、新しいことが、こんなことをやっているやつがいるとかということがあすからのモチベーションになるんです。それがしかも全国的に名の売れた有名先生がわざわざここまで来て話してくれると、若い子は絶対行きますよ。行って、おもしろかった、楽しかったって、それがまた明日からの現場の仕事の糧になるんですよ。話のような事が現実的になくても、いつかそういう事案があるかもしれないと。

### 【プライベートについて】

今は垂水市に住んでいて、子ども2人は学生です。去年の4月から常勤医師が1人体制なので、休日に趣味とか何もできないです。1日ぐらいでは全然疲れがとれない感じですね。

この間、当直が来ていただいて、2日間休みがあったんですが、土曜日でも夜までずっと待ちましたので、土曜日は全然休みがないですよ。もうぐったりして、猫とぐたっとしていただけですね。どこか出ていこうなんていう気にはとてなれないですね。2日連休だとさすがに、よし頑張れるぞという感じがしましたが、1日ぐらいではなかなか疲れがとれないし、本当に何もできないような感じですね。

### 【大隅の魅力について】

ここに来てもう8年余りになるのに、まだ猿ヶ城溪谷にも、千本イチョウにも行ったことがないんです。山の上集落で、芋を干すことで有名な大野原というところには行きました。そこを過ぎてずっと

行くと大隅湖に行くんでしょう。登っていく道が凍るので、あそこの人は途中で車を置いていくんだと言っていましたけど。何か峠みたいなところでしたね。

### 【医療の確保について】

建設的な意見としては、地域の病院にやっぱりエースで4番がいなくなかなかね、看板がいなくなかなか若い子たちは振り向いてくれないかなど。こういう僻地だと、教育制度が変わらなければ、さっきも言ったように、小学校の高学年から中学、高校の子供を抱えた年齢の医師を妻ごと、家族ごと呼び込むのはちょっと構造的に無理があるんじゃないかと。単身赴任なら何とかなるでしょうけど。

そうなると、若い子か年寄りの再活用と。女性の再活用と、再活用と言ったら悪いけど、女性の潜在的に持っている、看護師さんとかも資格を持っている人の20%から30%は隠れていると言うじゃないですか。今はもう医学生でも4割から5割は女性の時代ですから、女性は妊娠・出産の時期もあるので、そういう人たちをうまくことワーキングシェアしながら、活用して頑張ってくださいということも考える必要があると思います。

年寄りか若い子となると、年寄りはおもかく若い子を呼び込むためには、さっき言ったエースで4番が時々巡回的に、何か月に一遍か講演とか勉強会をしに来てくれると。それでなければ、あとはこれは余り現実的ではないかもしれないけど、給料を上げるしかないかもね。昔、北海道なんかの僻地の診療所の院長なんかはすごい高いお金で引っ張って来ていたようなこともあったけど、それぐらいしかないかなと思いますね。

だから、バイパスみたいなのができて、空港へのアクセスがよくなったり、新幹線へのアクセスがよくなったりして、移動できて、学会とか勉強会に行きやすくなるというのもひとつすごくいいことだと思いますよ。



垂水市大野原芋干風景



まつだ ゆきひさ  
**松田 幸久**

まつだこどもクリニック院長（鹿屋市）



【プロフィール】

出身は長崎県の島原市です。小中高と島原で、小中高ともにお城の三の丸内にある学校で、12年間登下校の道は変わりませんでした。

医師になろうと思ったのは、高校1、2年の頃は数学が好きで、数学の先生になればと思っていたんですが、姉が看護師、兄が九大の医学部に入っていて、兄から、もうちょっと勉強して医学部を目指したらと言われたことと、うちは本屋だったんですが、経営的に厳しくて、医師は収入が多いんだと思ったことがきっかけでした。医師になってこうしたいというのはなかったんです。

兄の大学を何回かチャレンジしたけど合格せず、鹿大に引っかかったという感じで、もう浪人したくないということで鹿児島大学に来ました。

大学を昭和58年に卒業して、しばらく大学にいて、その後、南九州病院や鹿児島市医師会病院、今給黎病院、かごしま子ども病院に勤務して、鹿屋市で開業しました。鹿屋には縁もゆかりもなかったんですけど。

小児科医になったきっかけは、大学6年の時、各科を2週間ずつ回る臨床修練で、小児科の際、自分が担当した患者が重症の患者です。主治医の先生がすごく良く診ていたんですが、亡くなってしまったんです。ショックでしたが、その時、小児科の先生達が代わる代わる心マッサージなど、一人の子どもの命が消えていこうとしている時、一生懸命している姿を見て、これはすごいなと思い決めました。

【開業について】

ここに来る2年くらい前父が倒れたため、実家に帰って地元の病院に勤務しながら父を看取りました。父も2年間孫と過ごしてくれたし、自分自身そろそろ本気でどうするか決めないといけないと思いました。

島原市を見たとき、子どもの数はそれほど多くはなく、僕が入り込んで邪魔をしてはいけないと思ったので、当時の鹿大の教授に「鹿児島に戻って、僕自身一人でやってみたい。いろいろ他の先生にも相談したんですが、開業して自分の思

うとおりにやってみたい。どこか開業する場所はないでしょうか。」と相談したら、「何もなければ大隅はどうなの。」と言われ、別に仕事ができればいいですよ答えたら、一度、鹿屋のK先生と話をしてみたらという助言を頂きました。

それで、K先生に会ったら、「絶対、大隅に来て欲しい、（小児科医）は3件しかない中で、ふうふうしているよ。」と言われ、また、当時、鹿屋医療センターの小児科のF先生（現、北薩病院小児科部長）に「僕が来たらどうやるか？」と聞いたら、「大歓迎ですよ。」と言われました。そこまで言ってくれたら医者冥利につきるなど思っていたら、一週間もしないうちに、当時の鹿屋市医師会長から電話があり、「どこに開業するの？待ってるからね。」と言われうれしかったですね。

開業準備から開業直後は、まだ勤務しており、土地も決まっていなくて、お金もなかったのが苦労の連続でした。

8月に開業し9月を乗り越え10月にはいって、税理士さんからやっと軌道に乗ったみたいですねと言われ、ちょっとホットしました。本当に、そんな感じで最初はばたばたでした。

当時は、夜間当番も月2～3回していました。夜7時から朝7時まで、それから自分のクリニックの患者さんを診るということもありましたが、今より10歳以上若かったので大丈夫でした。でも夜間当番に小児科も入ってきたので、子どもの患者がどんどん増えてきました。これは何とかしないといけないということで、お母さん達との勉強会やFMかのやを使った啓発をしました。勉強会をしても来る人は来るけど、どうせ、来ない人は来ないから夜間の患者は減らないよねと言ってたんですが、2年したら頭打ちになって少しずつ減ってきました。お母さん達もFMを聞いてくれているのかな、また、勉強会に来ているリピーターのお母さん達から回り回って聞いてくれば、直接話をしなくてもいいのかなと思いましたね。

【日頃の思いや取組など】

クリニックの入り口にくまのオブジェを

おいていますが、これは、僕が勤務医時代に書いた「どろぼうとサンタ」という絵本の中に出てくる主人公の目の見えない子供のお守りがくまのペンダントで、ずっと、自分の頭の中にはくまのペンダントというものがあって、開業の際、それをうちのマークにしようと思って作りました。

勤務医時代は、病院保育という言葉が聞かれるようになってきて、重症の子供さん方と花見、花火大会、クリスマスなどしていました。

開業したら6時までで、あとは自由な時間だと思っていたら大きな間違いで、それこそ、いろんな勉強会はあるし、会議はあるし、ただ病棟がないだけで、ほかの仕事はいっぱいこっちに回ってきて、昼間は市町の健診や、看護学校の講義、学校医、園医などいろんな仕事もあったんだと痛感しました。今は養護学校の校医ですが、産業医の資格も取らないといけなかったし、結構、忙しかったです。

大隅地域には、特別な療養施設も無い状況にありましたので、障害者問題を地域で考えるネットワークづくりにも取り組みました。地域全体を療育の場とし、地域の医療機関、行政、教育の場の人達と障害を持った子の保護者を会員として、地域でできることの勉強会や研修会などを行っています。来年が10周年となります。(おおすみ療育ネットワーク)

また、自分が実行委員長として、このネットワークの運営委員、特別支援学校、鹿屋市職員、社協、福祉施設、作業所、町おこし「かのや」の人々と一緒に、平成23年から「とおきの音楽祭」を開催しています。音楽祭向けの企画には準備におよそ4か月かかりますが、この間、町で商業活動をしている若手の人達や高校生が、障害を持った人達と一緒に話し合うことにより、心が通じ合っていく時間や空間となっています。音楽祭の開催を通じて多職種の人と知り合い、大隅を盛り上げていきたいと思っています。出身ではないけど、住めば自分のふるさですからね。医療だけではなく、若者が住みやすくとか、戻ってこれる、ここで働きたいと思うような環境づくりは大人の責任でやらないと思うんです。

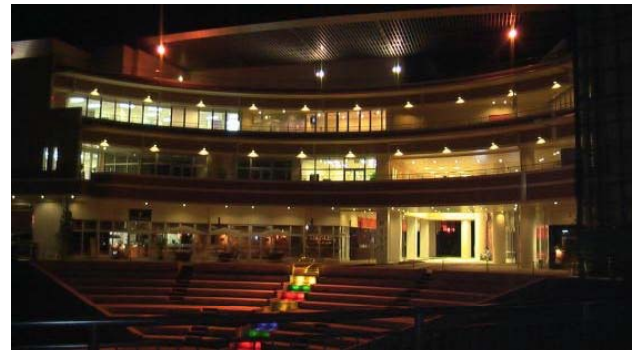
#### 【プライベートについて】

家族は妻と双子の男の子の4人家族で、鹿児島市に住んでいるため、私一人鹿屋にいて、週1回は、鹿児島の自宅に

行っています。

趣味は、元々、学生時代はクラシックギターを弾いていましたが、医師になり爪を伸ばせないということで、バイオリンを始めました。10年くらいになります。弾きすぎて腱鞘炎になったこともありますが、昨年は、第九にも出させて頂きました。ふうふう言いながら。もうアドレナリンが出っぱなしで、終わったときにはしばらく動けなかったですよね。感動そのものでした。やった、やったあとという感じです。

大隅で好きな場所というと、とおきの音楽祭を開催しているリナシティの水辺のステージの辺りは好きですね。



#### 【医師を目指す大隅の子供達へ】

大人の人たちの話をよく聞いてというのは思いますよね。僕も小さいころから、じいちゃん、ばあちゃんたちだけではなくて、地域の子どもクラブなんかで、それこそ近所のおじさんたちとか、近所のお兄ちゃんたちとよく遊んだりしていて、そうやってくると郷土愛ができてきて、そして、それこそ大隅でこういう形で仕事をしたいなというふうなのが出てくるんじゃないかなと思うんですけど。

医師に関して言うと、いろんな仕事がありますけど、目指すところというのは、体の健康だけじゃなくて、心の健康まで見れるような医師、偉くなる必要もないし、それからテクニックのある何とかドクターと言われるような医師でなくても、本当に地域の人たちと語り合ったり、いろんな形でかかわり合えるような、医師も地域の中の一組織をしている人だよというのを感じてもらえばなと思いますけどね。



みやじクリニック院長（志布志市）



### 【プロフィール】

出身は、志布志市有明町です。蓬原幼稚園、蓬原小学校を卒業して、中学は鹿児島市の城西中、高校は鶴丸高校です。大学は鹿大で、そして大学病院や県立鹿屋病院を経て、一時、東京女子医大に2年半くらい居て、それから鹿屋の県病院に2回目ですが、部長で来て、それから3年してここで開業しました。平成10年です。

医師になろうと思った理由は特にはありませんが、父を含め周囲の勧めがありましたね。自分ではとにかく何か余りそんな意志も、誰かが病気でとか、そんなのを見てなろうと思ったとかいうきっかけもないんですけど、勧められるままに進学してという感じでした。そういう形です。

専門は、大学は放射線科でした。放射線診断・治療、治療が最後は主で、がん治療とか、放射線の治療とかによく当たっていましたけど。そういうのから見ると今はもう全然、畑違いで、町医者ですけど。放射線科を目指したのは、画像診断みたいな、ああいうのから興味湧いたことや先輩の勧誘もありましたね。検査は少ないですがCT、MRIまで設置しています。

開業の際は、学位授与のお礼と開業の決意を当時の教授に伝えに行ったんですが、「だめだ、何を考えているんだ。これまでやってきた事はどうなるんだ。」と言われました。教授の言葉はありがたかったんですが、父が地元で町長をしていた頃から、息子は地元で開業させると周囲へ公言しており、医師不足もあり地域医療に取り組む決意をしたところでした。

### 【日頃の思い、経営方針】

経営理念は、地域の皆様に親しまれるクリニックを目指し、①かかりつけクリニックとして地域医療に貢献する、②患者の声に謙虚に耳を傾け、良い接遇に努める、③職員一同は、専門の医療従事者

として日々努力し職務を果たすことの3つを掲げています。

自慢の一つは、開業以来のスタッフが誰も辞めていないことですかね。最初は職員5人でスタートし、今は9人ですが、顔ぶれが変わっていないんです。小さな診療所ですがチームワーク良く、和気藹々でやっていますし、自分の考えもよく分かってくれていると思います。

逆に、大変だなと思うことは、この地域は医師が少ないことから、医師会の役員や行政の委員、介護審査会、警察協力医、月3～4回の医師会当直、複数の学校医など、いろんな仕事があり、なかなか休めないということですかね。自営業ですから休む・休診とすればいいんですが、そこはなかなかですよね。だから、大型連休や年末年始も30～40人と患者さんが来られます。

だから、家族サービスといっても、結構、離れ業を使っていますよ。長崎のハウステンボスも車や新幹線を使っての日帰りを何回かしたし、フェリーさんふらわあで大阪まで行って、USJにも行きました。うちのクリニックは水曜日を休診としているので、火曜日の夕方6時半に志布志港を出港して、朝、7時半に大阪南港、一日子ども達を遊ばせて夕方のフェリーで帰って、木曜日の朝、志布志港に着きます。子ども達は船の中でも大喜びでしたが、妻は寝ているだけと思っていたけど、もう二度とごめんだわと言っていますよ。子ども達からは、USJはハリーポッターも出来たので、また、連れて行ってと言われていますよ。

### 【医師確保について】

行政に新規の開業支援をして欲しいと思います。全国的には開業医は増えているそうです。医療関係のコンサルタントみたいなことをしている人と話をしていたら、大隅半島での開業志向がないと言っていましたね。開業をする先生の相談を結構受けるみたいですが、鹿児島市近郊のビル開業が多いとか、地域的には霧島市付近までだそうです。

そこで、企業誘致じゃないけど、土地と

か、何年間固定資産税を減免とか、何かうまくできないですかね。私が開業するときも、私は地元だし、父のつながりもあり、いろんな人を知っていて、ここが良いとか言えますが、一般的に、こちらの出身ではない先生は、適地を探すのに大変だったみたいです。だから、こんなところどうですかとか、こんなところにされたらというような、企業誘致として、病院・診療所を考えることはできないでしょうか。医院、診療所が出来れば、雇用にもなるし、開業の先生たちが来れば、4～5年で閉院という訳にはいかないのです。最低でも10年、20年は続きます。

それから、医師会の集まりなんかでたまに聞くのが、若い頃開業を考えてできなかったシニアで、60歳前後で大きな病院をやめてから地域で働くという先生に対する開業政策は考えられないかとも思いますね。そういう先生はもう専門だけでなく、一時は町のお医者さんとしてのトレーニングをして開業を誘導するような政策ですね。

閉院した施設で使えそうなところとかを斡旋する仕組みとかがあればいいと思いますね。

### 【プライベートについて】

家族は妻と子どもが3人です。今、高一、中三、小五です。みんな鹿児島市内ですね。妻は薬剤師でもあり、昼間はこっちに仕事をしに帰ってきます。私はここで留守を守っています。

趣味というところ、本当は絵を描いたりするのが好きなんですけど、今はそういう暇もないですね。それと、犬、猫は好きで家にいっぱい飼っていますよ。犬、猫が、癒しになっているんですよ。

あと、写真を撮るのが好きだから、よくスナップ写真を撮って記録をしていますね。壁を塗ったときとか、みんなで掃除をしたりとか。それに、ロケットの打ち上げが見えるので写真に撮ったりしますね。

最近、たまにはプラモデルづくりとかしているんですけど、子どもの時と違い、だんだん手元が見えなくて、なかなか進まないというか、完成しないんです。中途のものが増えてきています。

好きな場所というと、時期的には志布志市有明町の香花園なんかもツツジが連休のころきれいですね。それと、そんな有名ではないですが、近くの宇都山もきれいです。宇都山のところも展望台になっていて、志布志湾の枇榔島もきれいに見えますよ。志布志湾が一望ですので、1月1日は毎年初日を見に行くんです。

### 【医師を目指す大隅の子ども達へ】

ここで生まれ育った子供たちは特に地域医療のやりがいもあるし、年配の方、先輩の方から感謝をされると思います。やりがいのある仕事で自分の家族のためにもなるので、専門的な勉強をしてからでも地元へ帰って来て欲しいですね。

ベテランの方も地域医療に貢献しながらシニアライフを故郷で過ごされるのも良いかと思います。

生活環境も、都会にいたら、車1台とめるのも大変ですもんね。鹿児島市内でもたまに走れば窮屈ですよ、こっちばかり走っていると、渋滞ありません。



香花園